

1. 西谷地区の概要

鏡 味 治 也

1. はじめに
2. 西谷地区の概要
3. 各集落の概要
4. 農業の概観
5. おわりに

1. はじめに

金沢大学文学部文化人類学研究室では、2007年度の調査実習を加賀市山中温泉（旧山中町）の西谷地区に含まれる下谷・菅谷・栢野・我谷の4集落を対象に実施した。本報告書はその調査実習に参加した学部3年生と大学院修士1年生および教員が、おもにその際に得た資料にもとづき、それぞれの関心を持ったテーマについて分担執筆した各章から構成されており、当研究室の調査実習報告書としては23冊目のものとなる¹⁾。

今年度の調査対象とした西谷地区は、1889（明治22）年から1955（昭和30）年までは西谷村として単独村政を実施し、1955年に山中町に合併し、その山中町が2005（平成17）年に加賀市に合併してからは、加賀市の一部となった地区である。

本実習調査はこの西谷地区を現在構成している下谷・菅谷・栢野・我谷の4つの集落を取り上げて、そこでの住民の生活の変化と現況の把握を聞き取りと観察を通じて行った。本書はその調査実習の成果報告書である。これまで同様、2007年7月末から8月初めの1週間をかけて行った本調査では、参加学生はとくに自分の調査テーマを決めず、地域の生活の総体について幅広く聞き取っていく方法を用いた。本調査の終わりの段階で各学生にそれぞれ関心をもったテーマをあげさせ、以後はそれぞれの学生の関心にもとづいた補充調査を随時行った。本報告書はそうした学生各自のテーマをもとにした章構成をとっているため、全体として対象とした集落に関する調査内容を網羅するかたちにはなっていない。それを補足する意味で、まず本章では調査対象の4

集落の概要を提示したあと、重要な生業のひとつでありながら各論では触れられない農業について概観する。

2. 西谷地区の概要

西谷地区は大聖寺川の上流部に位置し、もともと 13 の集落で構成されていた。その位置関係を下流から順に示すと、まず山中温泉街の対岸にあたる大聖寺川右岸の段丘に下谷があり、その続きの上流側に菅谷が位置する。菅谷の対岸、つまり温泉街から上流部にさかのぼった左岸に栢野がある。そこからさらにさかのぼり、川が大きく東に湾曲するところに我谷があり、その湾曲部に西から合流する支流ぞいに風谷が、また南から合流する支流の先に大内があった。我谷から東の本流ぞいには枯渇、片谷、坂下、小杉、生水、九谷の各集落が点々と存在し、真砂はその最上流部に位置した。

これら 13 集落のうちの上流部のものは、大聖寺川治水のために計画実施されたダム建設による移転や、生計を支えた炭焼き業や木挽き業の衰退などによる移住によって、廃村や低地への移転があいついだ。大聖寺川上流のダム建設は、まず我谷集落のあった場所に 1964 年我谷ダムが建設され、水没した我谷の住民は水没をまぬがれた我谷の下流側の土地と、さらに下流の栢野集落の上流部に多くが移り住んだ。さらに我谷ダムの上流部に九谷ダムの建設が 1998 年から始まり、2005 年に完成した。このため枯渇、片谷、坂下、小杉、生水、九谷が水没することになり、その 86 世帯は山中温泉街の下流側に続く加美谷台に開発された住宅団地に多くが移転した。

こうして現在、かつての西谷村の村域に位置する集落は下谷・菅谷・栢野・我谷の 4 集落のみとなっている。表 1 に 1889（明治 22）年以降の各集落の人口と世帯数の動態をあげた。奥地の集落は林業の衰退につれて世帯数・人口が減少し、ダム建設による移住でついに廃村に至った経緯が見て取れる。ただしそのなかで我谷は地区内へ半数近くの世界が移転したため、戸数を減らしつつも集落として存続している。いっぽう加美谷団地に移り住んだ住民はそちらで自治会を形成しており、現在の地区分けでは河南地区に含まれる。なお廃村した片谷で 2000 年に一定数の住人が見られるのは、ダム建設従事者の一時的な仮住まいを示すものと思われるが、聞き取りで確認はしていない。いっぽう温泉街に近い下谷や菅谷では 1960 年代以降大幅な住民の増加が認められるが、これは宅地開発と団地や温泉旅館の寮の建設によるものである。それについては各集落の世帯類型等の分析と合わせて次節でさらに詳しく触れる。

表1 西保地区各集落の人口・世帯数動態（上段：人口、下段：世帯数）

	1889	1935	1965	1970	1975	1980	1985	1990	1995	2000	2005
下谷	141	145	425	401	472	380	471	409	380	339	126
	26	21	114	118	134	128	175	171	156	142	126
菅谷	516	460	669	781	967	1,028	1,241	1,251	1,178	1,094	940
	91	79	153	169	245	305	492	452	465	445	390
栢野	199	209	381	239	207	192	195	184	187	171	133
	34	39	86	20	20	20	21	21	21	21	20
我谷	226	227	138	97	78	61	64	69	53	48	58
	40	35	19	20	19	15	17	19	17	18	26
風谷	186	126	81	56	16	11	9	7	5	4	2
	31	26	17	11	6	5	5	3	3	3	1
大内	133	164	82	55	21	8	0	0	0	0	0
	20	25	18	13	5	2	0	0	0	0	0
枯淵	197	121	80	64	58	52	46	28	9	0	0
	24	23	15	13	13	13	16	7	8	0	0
片谷	235	200	164	107	96	89	10	0	0	75	0
	35	38	34	23	24	23	3	0	0	72	0
坂下	250	85	30	18	22	22	0	0	0	0	0
	23	15	6	3	5	4	0	0	0	0	0
小杉	－	45	41	20	20	20	0	0	0	0	0
	－	9	8	6	4	5	0	0	0	0	0
生水	109	55	48	37	36	39	1	0	0	0	0
	16	10	11	9	9	11	1	0	0	0	0
九谷	159	138	90	62	52	32	27	0	0	0	0
	31	27	22	17	17	14	15	0	0	0	0
真砂	174	76	77	38	25	32	30	15	5	0	0
	26	17	18	12	9	25	22	9	2	0	0
計	2,425	2,051	2,306	1,975	2,070	1,966	2,094	1,963	1,817	1,731	1,420
	397	364	521	466	533	594	788	713	707	729	586

出所：1889・1935年の数値は『山中町史・完結編』（2006：240頁）より、1965-2005年の数値は国勢調査にもとづく『市町村地区別人口および世帯の概数』より

西谷地区は山がちなところに立地し、まとまった水田は菅谷にあるくらいで、農村というよりも山村からなる地区だった。西谷地区の生業については、西谷村時代の1935年に集計されたデー

タがある（表2参照）。

表2 旧西谷村の職業別戸数

	戸数	農業	木地挽 き	塗り蒔 絵	製炭	機業	交通運 輸	大工	その他
下谷	21	5	7	4	0	0	0	0	5
菅谷	79	45	16	2	0	1	0	6	9
栢野	39	16	9	0	0	2	1	0	11
我谷	35	5	2	0	4	1	3	2	18
風谷	26	0	0	0	16	2	1	0	7
大内	25	0	21	0	0	1	0	0	3
枯渕	23	6	3	0	8	2	0	0	4
片谷	38	0	0	0	14	3	2	2	17
坂下	15	0	1	0	8	1	0	0	5
小杉	9	5	1	0	1	0	2	0	0
生水	10	4	0	0	6	0	0	0	0
九谷	27	4	1	0	16	0	0	0	6
真砂	17	0	2	0	5	0	0	0	10
計	364	90	63	6	78	13	9	10	95

出所：『山中町史・完結編』（2006：240）掲載の表を一部加工した

戦前の状況ではあるが、農業とともに、木製の椀などを作る木地挽きや製炭が、とくに上流部の集落で盛んだったことがうかがえる。製炭は1955年頃まで、とくに上流部の集落のもっとも重要な生業だったが、石油燃料の普及で以後急速に衰退した。木地挽きはこの地区の特色ある生業で、山中塗に使う木地を供給してきたほか、輪島塗のために輪島方面へも出荷しており、その技術は高く評価されている。

旧西谷村は村役場を栢野に置き、下谷を通して山中温泉街に隣接するいつぼう、我谷から支流をさかのぼった風谷や大内を経由して福井方面に通じていた。山深い山村でありながら、物流や人的交流において決して域内で閉じていたわけではないことは確認しておく必要がある。

3. 各集落の概要

以下では現在西谷地区を構成する4集落の概要を、とくに年齢別人口構成や世帯類型に注目しながら概観する。なお以下の表で提示する数値は、2007年6月現在の住民票を基に集計したものである。

【下谷】

下谷集落は山中温泉街の対岸の狭い段丘に位置し、集落のまわりにいくらかの畑地があるのみで、旧山中町の中心地であった温泉街を相手にした木地師や塗師、さらに直接温泉街で働く職人が多かった。また西谷地区のなかで下谷だけは子どもたちが温泉街にある小学校に通い、その点でもそちらとのつながりの方が強かった。

畑地が宅地や旅館施設に転用されるようになってから人口が増えている。その年齢別人口構成と世帯類型を以下の表に示した。高齢者が多めだが、宅地の増加を反映してか若年層も一定程度有していることが読み取れる。世帯類型では65歳以上の単身および夫婦のみの高齢者世帯が全体の3割を超え、世帯の高齢化が進んでいることがわかる。

表3 下谷の年齢別人口構成

年齢	0-9	10-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70-79	80-89	90-99	計
男	11	8	19	6	14	21	22	15	13	2	129
女	3	7	15	10	19	25	34	25	20	0	160
計	14	15	34	16	33	46	56	40	33	2	289

表4 下谷の世帯類型

単身 (65 歳以上)	26
単身 (65 歳以下)	35
夫婦 (65 歳以上)	16
夫婦 (65 歳以下)	8
核家族 (未婚の子供 40 歳以上)	4
核家族 (未婚の子供 40 歳以下)	13
拡大家族	12
その他	18
計	132

【菅谷】

菅谷は下谷の位置する段丘の上流側に位置し、集落のまわりに比較的まとまった平地が開け、それを耕地とした農業が重要な生業のひとつとなってきた。ただし明治の半ばまでは桑畑などの畑地がほとんどで、1905（明治38）年に上流の我谷区内から用水が引かれてはじめて本格的な水田開拓が可能になった。以後水田稲作が木地挽きや機業と並ぶ重要な生業となり、比較的大きな集落を維持してきた。

その後1960年代初めに集落の下谷側に町営住宅が建設され、続いて70年代には県営住宅や日吉台団地が作られ、下谷とのあいだの畑地も宅地や旅館施設に転用されるようになって、人口は大幅に増加した。そこで菅谷の年齢別人口と世帯類型については、旧集落と新たな宅地、町営住

宅、県営住宅、日吉台団地、アパートや旅館などの寮に分けて見てみる。町営・県営住宅や団地、アパート、寮の住人は基本的に菅谷の外からの転入者であるのに対して、下谷との間の畑地を転用して建てられた住宅には、旧集落住民の新宅が含まれる。

表 5 菅谷の旧集落および新宅地の年齢別人口構成

年齢	0-9	10-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70-79	80-89	90-99	計
男	27	26	37	33	30	37	40	36	18	3	287
女	24	25	30	41	27	48	44	43	26	6	314
計	51	51	67	74	57	85	84	79	44	9	601

表 6 菅谷の町営住宅の年齢別人口構成

年齢	0-9	10-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70-79	80-89	90-99	計
男	1	0	2	0	2	2	3	4	1	0	15
女	0	0	3	0	0	5	6	9	2	0	25
計	1	0	5	0	0	7	9	19	3	0	40

表 7 菅谷の県営住宅の年齢別人口構成

年齢	0-9	10-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70-79	80-89	90-99	計
男	3	9	7	3	2	4	1	4	0	0	30
女	2	6	3	4	10	11	6	5	1	0	48
計	5	15	10	7	12	15	7	9	1	0	78

表 8 菅谷の日吉台団地の年齢別人口構成

年齢	0-9	10-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70-79	80-89	90-99	計
男	0	2	6	6	4	8	7	1	1	0	35
女	3	2	3	7	3	8	7	4	1	0	38
計	3	4	9	13	7	16	14	5	2	0	73

表 9 菅谷のアパート・寮の年齢別人口構成

年齢	0-9	10-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70-79	80-89	90-99	計
男	4	3	5	4	7	5	10	2	0	0	40
女	3	4	11	6	14	28	7	2	2	0	77
計	7	7	16	10	21	33	17	4	2	0	117

旧集落と新たな宅地を合わせた住民の年齢は、若年層から高齢層まで万遍なく分布している。またその世帯類型は3世代同居の拡大家族と若い子供をもつ核家族が主要なタイプとなっており、それぞれ旧集落と新宅地の類型を代表している。集合住宅のうちいちばん早く建てられた町営住宅は、若年層がわずかで住民の高齢化が目立ち、とくに高齢者単身世帯が突出している。それに

対して県営住宅や団地ではむしろ壮年や若い家族が主流である。アパート・寮では単身世帯が大半なのは当然として、中年女性の多さが目を引き、これは温泉街で働く女性の存在を反映したもののと言える。

表 10 菅谷の世帯類型

	旧集落・宅地	町営住宅	県営住宅	団地	アパート・寮
単身 (65 歳以上)	17	13	6	4	5
単身 (65 歳以下)	9	6	9	4	51
夫婦 (65 歳以上)	18	3	2	2	0
夫婦 (65 歳以下)	12	2	1	4	7
核家族 (子供 40 歳以上)	10	0	1	1	1
核家族 (子供 40 歳以下)	51	4	15	12	13
拡大家族	58	0	4	3	2
その他	2	1	1	0	3
計	177	29	39	30	82

【栢野】

菅谷がまとまった平地をもち大きな集落を形成しながら上流部への経路をもたず孤立していたのに対して、栢野はその対岸の狭い段丘に位置しながら上流部の集落への結節点に位置し、西谷村役場が置かれるなど地区の中心的位置を占めてきた。しかし戦後の山中町への合併後はそうした役割も低下し、木地挽きのほかは勤め人が多くなっている。

表 11 栢野の年齢別人口構成

年齢	0~9	10~19	20~29	30~39	40~49	50~59	60~69	70~79	80~89	90~99	計
男	2	11	5	4	12	9	8	9	2	2	64
女	1	5	7	6	10	13	6	10	10	3	71
計	3	16	12	10	22	22	14	19	12	5	135

表 12 栢野の世帯類型

単身 (65 歳以上)	2
単身 (65 歳以下)	5
夫婦 (65 歳以上)	3
夫婦 (65 歳以下)	1
核家族 (未婚の子供 40 歳以上)	1
核家族 (未婚の子供 40 歳以下)	5
拡大家族	14
その他	9
計	40

栢野の年齢分布と世帯類型を見ると、高齢層がやや多いが壮年・若年層も少なからず有し、3世代同居の拡大家族が主流となっている。山中温泉街や加賀市の平野部にじゅうぶん通勤できる位置にあることが、人口の流出をくい止めていることが見て取れる。

【我谷】

移転前の我谷は、上流部の集落や福井方面へ抜ける峠道への玄関口にあたり、郵便局が置かれるなど地域の要所の位置を占める集落だった。しかしダム建設による移転後は戸数も半数に減り、西谷地区でも最奥の集落になっている。我谷ダムからかつての大内集落を経て福井へ抜ける道は、道路も整備され永平寺への定期バスも通っているが、我谷はその通過点になっているにすぎない。そうした現状は集落住民の年齢構成や世帯類型にも反映し、高齢者の比率が高く、また65歳以上の単身・夫婦世帯が多くなっている。

表 13 我谷の年齢別人口構成

年齢	0-9	10-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70-79	80-89	90-99	計
男	0	4	3	0	4	1	5	8	4	0	29
女	1	5	7	6	10	13	6	10	10	3	71
計	1	9	10	6	14	14	11	18	14	3	100

表 14 下谷の世帯類型

単身 (65 歳以上)	4
単身 (65 歳以下)	1
夫婦 (65 歳以上)	5
夫婦 (65 歳以下)	3
核家族 (未婚の子供 40 歳以上)	2
核家族 (未婚の子供 40 歳以下)	1
拡大家族	3
その他	1
計	20

4. 農業の概観

山間に立地する西谷地区において、現在まで農業が一定の重要性をもつのは、まとまった水田をもつ菅谷くらいである。農業センサスによれば、1960年の時点で菅谷の総戸数98戸のうち農家が63戸だったのに対して、栢野は総戸数53戸のうち農家17戸、下谷は総戸数43戸のうち農家9戸、移転前の我谷は総戸数33戸のうち28戸だった。下谷と我谷はその後農家が減少し、以後の農業センサスに載らなくなっている。

菅谷は1905（明治38）年の用水開設ではじめてまとまった水田が作れるようになり、このとき4畝歩田にそろえる耕地整理も行った。以後5月末に田植えし9月末に刈り取る早稲種を中心に、裏作で麦やじゃがいもも作っていた。近年では5月の連休に田植えをし9月前半に刈り取るコシヒカリが主流になり、しかも実態は自給米の生産がほとんどだという。また栢野では川沿いの狭い平地を利用した水田耕作と傾斜地での畑作が行われてきた。以下に両集落の農業センサスによる主なデータを表に示す。

表 15 菅谷の農業の概要（農業センサス農業集落カードより）

	1960	1970	1975	1980	1985	1990	1995	2000
農家数 （販売）	63	43	36	32	37	30 (15)	29 (13)	22 (15)
専業 （販売）	6	-	-	-	-	- (-)	1 (-)	(-)
1種兼業 （販売）	9	2	-	-	-	- (-)	1 (-)	(-)
2種兼業 （販売）	48	41	36	32	37	30 (15)	27 (13)	(15)
経営田面積 (a) （販売）	2,424	2,000	1,494	1,315	1,157	919 (646)	930 (643)	754 (664)
経営畑面積 (a) （販売）	212	40	27	32	41	42 (9)	78 (52)	80 (40)

表 16 栢野の農業の概要（農業センサス農業集落カードより）

	1960	1970	1975	1980	1985	1990	1995	2000
農家数 （販売）	17	14	16	14	10	8 (1)	6 (3)	5 (3)
専業 （販売）	-	-	-	1	-	- (-)	- (1)	(1)
1種兼業 （販売）	-	-	-	-	1	- (-)	1 (1)	(1)
2種兼業 （販売）	17	14	16	13	9	8 (1)	5 (2)	(2)
経営田面積 (a) （販売）	399	270	275	128	111	30 (30)	30 (30)	112 (82)
経営畑面積 (a) （販売）	90	130	194	84	73	130 (20)	100 (65)	33 (23)

1960年の時点で菅谷でも専業および一兼業農家は農家全体の4分の1にすぎず、75年にはすべてが二兼業になってしまっている。栢野では60年の時点からすべてが二兼業である。農業の位置づけはこの2集落においても高いものではなかった。近年に至っては農家の数自体が60年当

時に比べて3分の1にまで減少し、農業の比重の低下は覆うべくもない。

耕地面積も同様に減り続けている。菅谷では60年以降水田面積が急速に減少しているが、これは宅地開発や小学校、旅館施設等の建設による。栢野では水田も畑地も減っているが、ときに一方が減り他方が増えるという変化が見られるのは、同じ土地を状況に応じて水田と畑に切り替えているのではないかと推測される。

表にはあげていないが、センサスのデータで見る限り、農業就業者の年齢は、菅谷の男性で20歳代が、また栢野で30歳代が一部見られるが、あとは高齢者で、とくに女性の農業従事者はいずれの集落ともすべて60歳以上の高齢者である。

5. おわりに

以上、西谷地区と現在それを構成する4集落の概観を、各集落の人口構成と世帯類型、および農業の点から見てきた。地区全体や各集落の特色は、以下に続く各章でさらに細かく見ていくが、そのテーマは学生各自が興味を持った事柄を優先したため、この地区を語る際に重要な事柄がいくつか抜け落ちていることは述べるまでもない。たとえば菅谷で重要な産業であった機業については、聞き取りの際に十分な情報を得ることができなかったため本書のなかではとりあげていない。

短い本調査期間とその後の散発的な補充調査で得られたデータは限られたものであり、お話をうかがう機会のなかった方も多い。なにより学生の実習ということで調べる側の未熟さ言うまでもなく、本報告書の記述にも分析にも不正確、不十分な点が多々あるものと自覚している。関係各位の忌憚のないご批判、ご叱正をお願いする次第である。

注

1) 既刊の調査実習報告書の一覧は、巻末の「参考文献・参考資料」に掲げておいた。